

お銀ぎんさま



登場人物

ナレーター

お銀ぎん（まち）

渡辺華山
わたなべかざん

老人
らうじん

村の女おんな1

村の女おんな2



1



2



3



4



5



6



7



8

今から百数十年前のことです。相模のくに早川村に、まちという名の、野菊のぎくのような清楚せいそで美しい娘が住んでおりました。まちは百ひゃく姓しょうの幾右衛門いくえもんの娘で、村でも評判ひょうばんの気立てきだの優しい働き者やさでした。

まちが十八歳のとき、江戸は巢鴨すがものお屋敷やしきに奉公ほうこうに行くことになりました。このころ、行儀作法ぎようぎさほうを身につけるために、江戸のお屋敷むらむすめにあがる村娘むらむすめたちがいたのです。とは言え、誰もが行けるといわず、わけではなく、大きな農家のそれも選ばれた娘たちだったのです。

村の女 1

「あのよう、幾右衛門さんの娘は江戸に行くそうだよ」

村の女 2

「そうそう、巢鴨すがものお屋敷やしきにあがるんだってよ」

村の女 1

「さすが幾右衛門さんの娘だ。あの器量きりょうよしだものなあ」

村の女 2

「ほんと、うらやましいことだよ」

こうして江戸田原藩たはらはんのお屋敷やしきに奉公ほうこうにあがったまちは、そこで少年渡辺登わたなべのぼると出会います。まちは登のぼるをたいそうかわいがり、登のぼると



つてまちは姉のように慕うとても大事な人となりました。渡辺登、
のちわたなべかざん
後の渡辺崋山との大きな出会いでした。

まちはお屋敷ではギンと呼ばれていました。そのお屋敷で、ギン
やしき
にとつてはもうひとつの運命的な出会いがありました。

時の藩主、三宅康友の側室となり、「お銀さま」と呼ばれるよう
ときはんしゅ みやけやすとも そくしつ
になったのです。その後、男の子友信が生まれ、幸せな日々を過ご
ご
していました。

ところがその幸せもつかの間、それからほどなく早川村の母が、
やまい とつぜんな
はやり病で突然亡くなってしまったのです。急ぎ、くにに帰った
ふたた
ギンは、再び江戸に戻ることはありませんでした。

ときは静かに流れ、二十数年の後のことです。

小園村に、その辺りではめったに見かけることのないひとりのお
こぞね
侍の姿がありました。弟子を連れた渡辺崋山でした。通りがかり
さむらい
の老人に幾右衛門のことを尋ねていました。



崋山

「早川の幾右衛門という人を知らぬか？」

老人

老人は、お侍さむらいに幾右衛門いくえもんのことをていねいに教えました。

「この細い道へんを入れていくと村が見えてくるだ。そこが早川村だよ。その辺へんで幾右衛門と聞いてくれれば、すぐおわかりになりますよ」
それから、老人は幾右衛門のことを詳しく話くわし出しました。

老人の話から、幾右衛門が八十歳ぐらいになること、江戸のお屋敷つかに仕えていた娘が錦にしきを飾かざって帰かえってきたものの、母の急死きゅうしで娘は小園村の大川清蔵せいぞうという人の所に嫁よめいだことなど、詳しいことがいろいろとわかりました。

崋山

崋山は、お銀さまが元気に暮くらしていることを知り、
「早くお銀さまにお会いしたい」

と、足を速はやめました。

崋山

村の子どもたちが遊あそんでいるところへかけ寄より、
「幾右衛門の家はいずこぞ？清蔵の家はいずこぞ？」
と、矢継やつぎぎ早はやに尋たずねました。

そして、清蔵の家は幾右衛門の家より近いと知らされ、子どもた

ちに案内させました。

地蔵堂じぞうどうを通り過ぎたところでいがぐり頭の子どもに会い、清蔵せいぞうの子だとわかると、その子の顔たずに尋ねる人の懐なつかしい面影おもかげを見ました。「そなたの家はいずこそぞ？」

と聞くと、清蔵の子はその問いかけには答えず、急いで走って行きました。崋山はそのあとを追い、とうとう目ざす家に行きついたのでした。その家はたいそう大きな農家のうかでした。

崋山
まち 「ごめん。誰だれかおらぬか？」
「どちらさまでございましょうか？」

崋山 頭に手拭てぬぐいをかぶった年老いた女おその人が、恐おそる恐おそる尋ねました。「子どもはお銀さまによく似にているが、この人は姑しゅうとめだろうか？」
と思ったものの、よく考えればもう二十年あまりの年月としつきが経たっているのだと思い、

崋山 「昔の姿すがたのままでいるはずがない」
と、よくよく顔を眺ながめると、耳の下ちがに大きなイボがあったのです。これはまぎれもなくお銀さまに違ちがいないと思いい、



崋山

「それがしは、子どものころとてもよくしていたただいた方を探して
おります」

まち

「さようでございませうか。もしや人違いではございませうか？」

崋山

「そなたの名は？」

まち

「私の名はまちと申します」

崋山

「昔の名は何と？」

まち

「まちでございませう」

崋山

「お銀と申せしことはなかつたか？」

まち

「昔江戸におりました頃、そのように呼ばれていたこともございま

したが・・・」

まち

「もしや、あなた様は江戸よりおいでになられたのでございませうか？」

まち

と、初めの態度とはうってかわり、

「まずは奥へお入りください」

と、頭の手拭いを取り招き入れました。

その顔を見て、崋山は間違いなくお銀さまと確信しました。探し



崋山
まち

ていた方にやつと巡り合えた喜びに、崋山のほほに思わず涙が伝うのでした。

「さて、それがしの名を覚えておられようか？」

「されば、渡辺の登さまで？こんなところまでよくお出でくださいました。まるで夢のようでございます」

ふたりは互いの思いを心ゆくまで語り合いました。崋山は子どもの頃の礼を尽くし、また、お銀さまの孫にあたるしん太郎が立派に成長したことを伝えるのでした。

まちは、用事で出かけている夫清蔵の留守を詫びるとともに、傍らにいた四人のわが子を次々に紹介すると、一同はずらつと並んでお辞儀をするのでした。

そのうち、長男清吉が厚木から馬を引いて帰り、その清吉を見た崋山は、たくましく素朴な男の子だと思いました。

まちが、崋山を精一杯もてなしていると、そこへまちの父幾右衛門もかけつけ、ささやかな宴となりました。



いつしか日も西に傾きかけ、農作業の妨げになることを思い、
 崑山は名残惜しくも大川家を後にしました。

清吉の勧めめる馬には乗らず、頭陀袋(注1)と笈(注2)を持ってもらい、
 家族一同の見送りを受けて出発しました。

それを見ていた村の人々は皆肝をつぶし、それぞれの門口に立ち
 見送るのでした。

遠く大山の山並みには夕日が映え、崑山の心も久しぶりに母の
 ようなぬくもりを感じていました。そして、満ち足りた思いで、今宵
 泊まりの厚木へと向かうのでした。

注1 頭陀袋・・・だぶだぶして何でも入るような袋

注2 笈・・・旅の際、物を入れ背負って持ち運ぶ、竹で編んだ箱

※ 小園の共同墓地にお銀さまの墓石が今も残されています。